拒絶過敏性と否定的認知が外傷後ストレス反応，精神的健康に与える影響
――対人関係の非致死性トラウマ体験に着目して――

人間福祉学科　福祉心理系　池沢雪未

DSM-5 の PTSD の診断基準 A には合致しない非致死性トラウマでも強い外傷後ストレス反応（PTSR）が生じることが明らかにされている。また，PTSR を生じさせる要因として，非致死性トラウマ体験の中でもいじめなどの対人関係の問題が挙げられ，これらの体験は，人に大きな心理的な痛みや傷を与え，長期間にわたって記憶に残り，その出来事とは関係のない後の対人関係にネガティブな影響を与える。よって本研究では，対人関係の非致死性トラウマ体験に着目し，拒絶過敏性と否定的認知が PTSR，精神的健康に与える影響を明らかにすることを目的とし，大学生を対象に質問紙調査を行った。

調査の結果，非致死性トラウマ体験者群において拒絶過敏性は PTSR に対し，非致死性トラウマ体験後の認知，抑うつを媒介して PTSR に影響を及ぼしていることが明らかになった。また，トラウマの有無による拒絶過敏性と精神的健康の差異について分析した結果，トラウマ体験があることによって，拒絶過敏性や抑うつが高まることが確認された。

以上の結果から，トラウマ体験者において介入を行う際には，PTSR だけでなく拒絶過敏性への介入を行うことが有用であると考えられる。拒絶過敏性への介入を行うことで，直接的に PTSR 自体の低減を図ることができるだけではなく，併存している抑うつ症状の低減が見込まれ，より PTSR の低減が促進されると考えられる。